

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.276

2026.9.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

—『日本先史土器図譜』と現在—

鈴木 正博

● 第71回 ● 「道統」系列の再編から解脱へ

『図譜』[B2式]研究は『図譜』標本を中核とし、周辺遺蹟も含め実際に層位的な伴存を通して遺蹟毎に濃淡ある諸系列の混在現象を窺うと共に、斑状のより深い「奥行」と対峙する。文献(1980b・c)では遺蹟毎の濃淡を経て反芻する諸系列の基本的な文様帯を重視し、「接圏文化」との連絡・交渉を「奥行」の定点として導出し、「土器社会論」の概念を構築する。

その直後から新たに「シンB2式」解説が席卷し今日に至る(早坂広人(2025)「研究史 加曾利B式(続)」『地域考古学』9号)。「シンB2式」研究は、『図譜』[B2式]研究から導出される東日本全体の俯瞰と比較型式学の実践(鈴木正博(2024)「宝ヶ峯断想」『利根川』46)を深耕する機会を得ず、東北地方とは無関係の如く閉じる研究姿勢が顕著であり、猛省を促したい。尚、『図譜』[B2式]研究を踏まえる立場からは、「シンB2式」は『図譜』[B2式]以前の地方的な系統となり、年代的には「B1-2式」比定、系統的には武蔵方面に分布する「小仙塚系列」として位置付けられる。

さて、『図譜』[B2式]の「奥行」に戻る。「遠部系列」は今日の層位関係の蓄積が目覚ましく、特に「遠部第5類土器」相当と広く称せざるを得ない程、自余の土器群も一層多様かつより複雑に構成され、範疇の拡張が必然化する。それ故に「B2式」の型式学的秩序は尚未明であるものの、現状の認識について一部に過ぎないが参考までに触れる。

初出の文献(1980b)によれば、『図譜』[B2式]である「遠部系列」の層位的「奥行」として、「接圏文化」の刺激により形成される「緩衝系列」や「大森系列」が導出されると共に、在地文化の「道統」から斑状末梢的に変遷する「常陸系列」や「下総系列」も仮説される。今日、前者の性質を「接圏系列」、後者の特徴を「道統系列」と呼び、「奥行」生成の新たな構造を模索する。

その後、「B2式」初頭の「細別」に「吉見台系列」(文献2009)が導出され、「B2式」の新古「細別」に在地の新たな「道統」を見出し、「奥

行」の変遷にも主体的な関与が判明する。即ち、本連載で標本とする西根遺蹟第4集中地点の調査成果により、「遠部系列」の「奥行」には新たな「系列」が広がり、「吉見台系列」から変遷する「道統」系列も斑状に見えてきた。

「接圏系列」は文献(1980b)に従う。本連載でも西根遺蹟第4集中地点の標本を用い、「緩衝系列」の一端(第69回参照)及び「大森系列」の変容実態(第70回)が概観される。

「道統」系列も未だ自余の全貌に触れ得ない。文献(1980b)当初、「常陸系列」(概念はp.241参照)と「下総系列」(大森貝塚例はp.264参照)は胴部文様帯の相異を異系列として扱う。「常陸系列」とは水戸市金洗沢遺蹟の1個体(『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』(1979)のp.444)を標識とする常陸の地域性が所以である。そこでは「遠部第5類土器」と類似する胴部文様帯に注意を促すが、やがて「吉見台系列」に金洗沢個体の母体を見出し、本連載にて「常陸系列」は撤回する。改訂後は口頸部を縄紋帯とし下端を沈線で区画する作法が共通する「下総系列」に再構成する(本連載第69回参照)。

但し、誤解を生む推敲ミスが連載に2点程認められている。お詫びし訂正する第1は、本連載第69回の「常陸系列」は後に「吉見台系列」として吸収」との記載で、「常陸系列」は後に「吉見台系列」の「道統」として「下総系列」に吸収」と校正・訂正する。第2は本連載第67回の「吉見台系列」として「B2(古)式」に再編成され」との記載で、同様に「吉見台系列」の「道

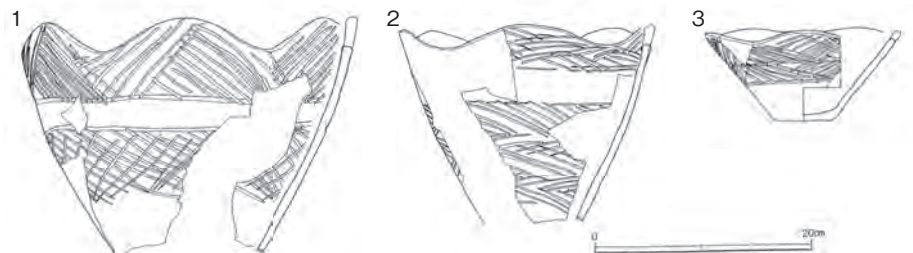
統」として再編成され」と校正・訂正を要する。共々赤字訂正を乞う。

こうして新生「下総系列」は内部に地域的系統的仲間を類型として広げ、「常総類型」(旧「常陸系列」)及び「総武類型」(旧「下総系列」)への再構成を経て、更に新たな類型が模索される。

そこで新たな類型を求めて再び西根遺蹟第4集中地点に注目し、縄紋施文に限定しない「遠部第5類土器」相当へと範疇を拡張するならば、即座に「吉見台系列」の「口頸部一体部斜格子目文様帯土器」が目玉に留まる。しかもその「道統」変遷は「遠部系列」の中核的な文様帯とは見事なまでに逸れており、新生「下総系列」の新たな構成に相応しい。

第83図は西根遺蹟第4集中地点の「口頸部一体部斜線文様帯土器」で、新生「下総系列」の「西根類型」として新たに構成される。『図譜』[B2式]標本とは「斜線文」の施文域が異なり、「半精製土器様式」の「遠部第四群土器」が共通する。1・2の波状口縁深鉢は口頸部を「鋸歯状斜線文」、胴部を1は「斜格子文」、2は「羽状斜線文」とし、「遠部系列」特有の「斜線文」を口頸部と体部の各施文域に配する。3の波状口縁(浅)鉢は口頸部を「鋸歯状斜線文」とし、底辺部へと移行する。

畢竟、最終的な範疇化を「口頸部一体部施文帯土器」と緩めて幾つかの類型により再編される新生「下総系列」(「常総類型」、「総武類型」、「西根類型」等)は、斑状末梢的な「道統」系列から解脱し、「B3式」比定文様帯の原型となる。



▲第83図：西根遺蹟第4集中地点の「下総系列西根類型」

※巻頭連載は隔月です。次回は鴨志田篤二さんです。

目次

■加曾利B式土器 「道統」系列の再編から解脱へ(第71回)	鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 私の考古遍歴(第22回)	工業善通 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第268回)	福島大樹 …3
■考古学者の書棚 『カタチの由来、データの未来』	本間岳人 …4

考古学の履歴書

私の考古遍歴 (第22回)

工楽 善通

1980年代に入って、平城発掘調査部に在籍していた頃、兵庫県加古川市教委から文化財の審議委員になってもらえないかと打診があった。よく聞いてみると、市の教育長が私の出た高砂高校の元国語教師であつたらしく、私が文化財関係の職についていることを何かで知って、郷土の歴史についても何かと理解があるだろうという事での指名だったようで、引き受けることにした。郷里高砂市と加古川市とは大川をはさんで隣どうし、中学・高校生の頃自転車で行き回った所で、遺跡などその所在を知っているつもりでいたが、審議会が回を重ねる度に未知の情報が報告されて新鮮であり、新しい知見が増えていった。市神野町の白鳳時代寺院西条廃寺や'90年代の終り頃から発掘調査が始まった西条古墳群の行者塚古墳などは、その成果が報道などで広く知られるようになった。

加古川市では'85年頃から、考古資料の展示部門もある市の総合文化センターの建設や運営に関して若干のお手伝いもして、奈文研を退職した2001年に同市の委員をやめた。

また、同じく1980年代に平城発掘調査部に居た頃、大阪府教委からも文化財保護審議委員になって欲しいと要請があり、隣県でもあり、同業の友人も多いので引き受けることにした。この時同委員会の委員長は美術史の望月信成氏で、副委員長は民俗学の鳥越憲三郎氏、考古学では小林行雄氏がおられ、錚々たるメンバーで、若輩者の私は気の引き締まる思いで出席した。ある時には、府指定の神社の社殿が、同じく府指定の近くに生えていた大木の倒壊によって破損したときの報告で、建造物専門の委員と植物学専門の委員の間で建物の移動と天然記念物の大木の伐採に関して議論になったことをいまなつかしく思う。そして、府指定候補遺跡の見学の際には、現地で色々と教えられることが多く、私にとって有意義な会であった。また、委員就任25年か何かで、20余名の委員らと表彰を受け、当時府知事だった横山ノック氏と写真を撮ったのを覚えている。その後、小林先生に替わり、京大から小野山節教授が就任され、また、後に天理大の金関恕さんが加わったり、どなたかの交替で奈文研の古いOBで庭園史の森綱先生が入られて、教示を受けることが多かった。こちらも奈文研退職で委員も辞退した。

1995年1月に阪神淡路大震災が発生し、神戸市も大きな被害が出た。そこでこれを機会に市でも文化財保護条例を制定することになった。それと同時に文化財保護審議委員会が設置されて、その委員就任を依頼された。神戸とその近郊には考古学関係の友人が多くいるし、市内桜ヶ丘国宝銅鐸にもかつて関わったこともあるので承諾した。第1回の会合は、教委の建物はなく、貸しビルの2階だったと思う。この会合で委員長に指名されたのは、神戸新聞社の元学芸部長の檀上重光氏で、当時は神戸市立博物館の副館長であった。氏は新聞記者の頃から県内各地を取材で回り、多くの考古学青年達と親交を深め、その成果を

『祖先のあしあと』(4分冊・1964)として出版している。氏は坪井さんと同年でよく馬が合い国史跡五色塚古墳の整備にも長年深く関わってこられ、また、飛鳥資料館の評議委員を勤めていただいており、私は大変心強かった。私の在任中には、北区に現存する最古の民家として箱木家住宅('26年に国宝となる)や、いく棟かの異人館、民家や銅鐸鋳型、五色塚古墳出土埴輪など、震災復興に伴う発掘調査現場の見学など、実に多くの知見を得ることが出来た。なかでも大きな勉強をさせてもらったのは、西区明石川の流域で見つかった新方(しんぼう)遺跡の弥生前期墓で、石鏃が射込まれた人骨や、鹿角製の指輪を右手に3ヶ装着した男性人骨の出土現場を見学出来た事は鮮明である。2000年だったかには、「瀬戸内弥生文化のパイオニア」というシンポジウムが神戸市で開かれて、大きな成果が上がった。

同じく1995年、長崎県の玄界灘に浮かぶ壱岐島の原の辻遺跡で、弥生時代の舟着き場とその堤防が、発掘調査によって発見されたと報道があった。当時、県の埋文センター長であった田川氏から電話で連絡があり、是非その現地を視察して教示して欲しいということであった。その頃私は狭山池に関して古代の堤防の構築法について関心をもっていたことからぜひ現場を見て状況をつかみたいと思い、原の辻遺跡へ飛んだ。現場でその土層を観察したところ、植物層に疑問があったが、そこは民有地で圃場整備予定地なので、間もなく埋め戻すという。今後、周辺部の調査も予定しているので、調査指導委員会に入ってもらえないかと頼まれ、喜んで応じることにした。その頃の県埋文センター主催の原の辻遺跡調査指導委員会には、九州大学教授西谷正氏、西南学院大学教授高倉洋彰氏、国立民俗学博物館佐原真氏、天理大学教授金関恕氏らが在籍し、のちには、武末純一氏、佐古和枝氏、松井章氏らが交替した。

2022年に西谷さんが退会されたので、'23に私も辞退した。この委員会に出席する事は、私にとって九州の新しい発掘情報や研究者の動向など興味深いニュースを仕入れることが出来るチャンスであり、交流の場として楽しんでいた。また帰路には日程が許せば、途中の調査中の遺跡の見学などをして、色々と知見を深めることが出来本当に楽しかった。なかでも有意義だったのは筑紫野市の丘陵地で見つかった前畑遺跡で、太宰府都城の羅城を考える上で極めて示唆的な遺構であった。

略 歴	
1939年	兵庫県高砂市に生まれる
1958年	兵庫県立高砂高等学校卒業
"	明治大学文学部史学地理学科入学
1964年	同 大学院修士課程修了
"	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ入所
1969年	文化庁記念物課へ出向
1973年	奈文研平城宮跡発掘調査部第2調査室へ配属
1992年	奈文研飛鳥資料館 学芸室長
1995年	埋蔵文化財センター長
1999年	奈良国立文化財研究所定年退職
"	(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所勤務
2001年～2021年3月	大阪府立狭山池博物館館長

隔月連載です。次回は山本暉久先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 268

天野山金剛寺遺跡 ～大阪府河内長野市

福島 大樹

私が最も思い出深い遺跡として、立命館大学考古学研究室が令和7年度に実施した天野山金剛寺遺跡について述べる。

天野山金剛寺遺跡は、大阪府河内長野市天野町に所在する中世寺院遺跡である。堺と高野山を結ぶ西高野街道と、京都と高野山を結ぶ東高野街道の結節点から南西約4.8kmの和泉丘陵上に広大な寺域を展開する。

寺伝では奈良時代に行基が創建し、平安時代には空海が修行した寺院と伝えられる。文献史料上の初見では承安2(1172)年で、阿観上人による弘法大師御影供の創始が記されている。この頃には金堂や多宝塔をはじめとする主要伽藍が整備されたとされる。なお、年輪年代測定によってもその造営年代が裏付けられている。さらに治承3(1179)年には八条女院の祈願所となり、有力貴族や武家からの寄進を背景に寺勢を大きく伸長させ、中世を通じて河内・和泉地域屈指の大寺院へと発展し、南河内の宗教・政治・経済を支える中核的存在となった。このことは、近世に描かれた『金剛寺境内図』(天野山金剛寺蔵)における壮麗な伽藍と数多くの坊院からもうかがえる。

なお、1935年の多宝塔解体修理調査では、12世紀末から13世紀前半の瓦器碗と共伴して白磁壺に納められた人骨が確認され、八条女院の遺骨と比定されている。また、南北朝時代には南朝の重要拠点となり、延元2(1337)年と正平15(1360)年の二度にわたり戦火に見舞われた。発掘調査で各所から検出された焼土層は、文献史料に記された戦乱を考古学的に裏付ける成果である。このように、天野山金剛寺遺跡は河内地域の中世史を語るうえで欠くことのできない寺院であり、これまでの発掘調査によって南北朝時代の坊院跡をはじめ、寺院運営や経済活動の実態を示す多様な遺構・遺物が確認され、その歴史の実像が徐々に明らかとなってきた。一方で、中心伽藍周辺部の坊院の構造や性格にはなお不明な点が多かった。

こうした課題の解明を目的として、令和7年度8月、立命館大学考古学研究室は天野山金剛寺と河内長野市教育委員会の協力を得て、中心伽藍の南西部、多宝塔を見下ろす平坦面の一画の発掘調査を実施した。発掘調査区は、『金剛寺境内図』では藪地として描かれる場所に位置する。そのため、近世段階では藪地となっていた当該区では中世に遺構が存在していたのか、その様相を確認することが目的だった。

当研究室では宿泊に伴う長期調査は久しく行われておらず、コロナ禍に見舞われた2020年以降初めてであり、調査員の多くにとっては、現場宿舎で寝食をともにする初めての経験であった。朝夕の食事は当番制で自炊し、夜は一室で休む。普段は接点の少なかった調査員や実習生も、一つの調査隊として生活と調査の双方を支えなければならなかった。

共同生活は決して順風満帆ではなかった。自炊に慣れていない調査員が炊飯器の水の線を米の量と勘違いして線の位置まで米を投入し、さらにはジャーの縁限界まで水を注ぎ、約20合にも及ぶ米をべちゃべちゃにするという、今では笑い話となった出来事もあった。さらに調査地は携帯電話の電波がほとんど届かず、常時通信環境の中で育った2000年代生まれの学生にとって、日常とはまったく異なる生活環境であった。それでも生活の基盤を整えることが調査を支える第一歩であるとの共通認識のもと、互いに助け合い、共同生活は次第に軌道に乗っていった。

こうした共同生活を通じ、自然と役割分担や意思疎通が生まれ、調査隊としての一体感も強まり、発掘調査も進行した。

発掘調査では現表土の直下から藪地形成に伴うと推定される近世の遺物を包含する旧表土層を確認し、その下層からは中世の遺物を伴う遺構群を検出した。靴の羽口や鉄滓を伴う集石遺構や落ち込み状遺構、石列を伴う溝状遺構を確認した。集石遺構や落ち込み状遺構から南北朝時代の遺物が確認できたことから当調査区では藪地形成前において、南北朝時代に利用されていたことが明らかとなった。今後の調査ではこれらの具体的な様相を明らかにしたい。

このような課題を受け、令和8年度の発掘調査では、これらの遺構群の性格と坊院との関係をさらに検討する予定である。本調査によって、天野山金剛寺遺跡の中心部周辺の具体的な土地利用や機能、さらには中世寺院空間の実像が一層明らかになることを期待したい。

本調査は、遺構・遺物に関する多くの成果をもたらしただけでなく、共同生活を通じて仲間と協力し、一つの調査を成し遂げることの意義を深く学ぶ機会となった。今年度の調査では、昨年度の経験を礎として、より充実した調査成果を挙げるとともに、天野山金剛寺遺跡の歴史の実像の解明に貢献したい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは西谷 漸さんです。



▲天野山金剛寺の多宝塔と発掘調査区



▲天野山金剛寺遺跡調査風景

考古学者の書棚

「カタチの由来、データの未来 —三次元計測の人類史学—」

中尾央 編／勁草書房 (2024)

本間 岳人

私は石造物の調査に、三次元計測、いわゆるフォトグラメトリを使っている。石塔のまわりを歩きながら数百枚の写真を撮り、それをつなぎ合わせて精密な三次元モデルを起こし、論文や報告書の図版にする。足場の悪い墓地でも、カメラとスケールさえあれば、半日もあれば数基分のデータが余裕でそろ。図面を準備する時間は目に見えて短くなり、細かな刻銘や微妙なゆがみも、あとから何度でも画面上で確かめられる。拓本や手実測にくらべれば、対象にほぼ触れずに、速く、しかも立体データとして残せるため、ずいぶん重宝している。

ただ現状では、結局のところ拓本や実測図という二次元の記録の、いわば上位互換にすぎないのではないかと。そんなことを思いつつ便利に使ってきた。三次元モデルから正射投影図を書き出し、断面を切り、拓本のような陰影をつくる。従来より速くきれいではあるけれど、やっていることは二次元の延長でしかないのかもしれない。では、三次元でなければできないことは何なのか。その問いに正面から向き合っているのが本書である。

三次元は二次元の上位互換か

本書は、中尾央氏が編者となり、考古学や人類学の研究者が三次元計測をめぐる論考を寄せ合った一冊である。全体は五章からなり、内容はゆるやかにつながっている。はじめに写真測量やレーザー計測による三次元データの取得を論じ、つづいてデータベースとオープンサイエンス、つまり大容量のデータをどう公開し、どう共有しつづけるかを問う。そのうえで、幾何学的形態測定学や球面調和関数といった解析手法を紹介し、最後に、それらを使って文化や集団の動きを読み解く研究へと進む。データを取り、公開し、解析し、歴史を描くまでの道のりを、ひとつとおり見渡せる構成になっている。

なかでも注目したいのが、三次元データを実際に使った研究の事例である。そこで語られていたのは、「上位互換」の域をこえた使い方だった。たとえば幾何学的形態測定学は、遺物の曲面のうえに多数のランドマークやセミランドマークを置き、かたちそのものを座標のデータとして統計的にあつかう。球面調和関数は、閉じた曲面を関数に分解して、形全体をまるごと数値で表す。こうした立体的な広がりを持つ座標や曲面の解析は、二次元の拓本や実測図では十分な精度で扱うことが困難である。三次元のデータがあつてはじめて、かたちの違いを集団としてとらえ、個体どうしの距離や系統のつながりまで精緻に論じられるようになる。本書はこうした方法で、たとえば弥生時代前期の土器や古人骨のかたちを比べ、その類似性から遺物や集団の広がりを描き出している。

記録から分析へ

こう考えてくると、三次元計測は記録のための道具から、分析の入口へと、意味あいが変わってくる。曲面や稜線の曲率、あらゆる部分の断面形状、体積や重心、左右のわずかな崩れ。

どれも二次元の図では削ぎ落とされてきた情報だが、三次元のデータならそのまま数値として使える。研磨の向きや工具の痕といった製作の手がかりも、面と面として突き合わせられる。一点ずつ眺めるだけでなく、集団としてのかたちの広がりや偏りを統計に載せられるのも大きい。試しに二つの石塔を点群やメッシュのまま重ねてみれば、どこがどれだけ違うのかが面全体の差分として浮かび上がるだろう。特定の稜線だけを抽出して比べていた従来の実測とは、解像度がまるで違う。三次元データは、よく見るための記録でもあるが、新しい問いを立てるための資料でもあるのだと、事例を通じてよくわかる。

石造物に引きつけて

自分の関心である中世石塔、とりわけ五輪塔に置きかえて考えてみる。五輪塔もまた地域ごと、地域や年代によって型式が変化する。この型式は長らく、二次元の実測図と研究者の観察をベースとして区別されてきた。けれども三次元データと本書で紹介された手法があれば、それらを数値として書き表し、型式の差を統計で確かめられるはずだ。たとえば幾何学的形態測定学を用いれば、塔全体のプロポーションの変化を座標として客観的に捉えられる。空風輪や水輪のように連続した曲面を持つ部位には、球面調和関数が力を発揮するかもしれない。時代ごとの微妙な変化は、二次元の輪郭線では実態を正確に捉えきれない。曲面全体を関数で表して比較することで、これまで「似ている」「力強い反り」と主観的に語られてきた感触を、明確な数字と図で記述し直せるようになるだろう。ただ正直なところ、統計学に疎い私にはこれらの手法は使いこなせそうもないのだが、三次元でなければできないことの輪郭は見えてくる。

「データの未来」という宿題

本書がもうひとつ、問いかけてくるのが、データの共有と受け渡しである。三次元データのほんとうの値打ちは、一つの報告に見栄えのする図を添えることではなく、ほかの人が測り直し、分析し直せる資料として蓄積され、公開されていくところにある。私も計測の成果をSketchfabで公開してきたが、それはあくまで視覚的に提示するためのモデルに過ぎない。三次元でなければできない使い方をさがすとは、機材や解析の話であると同時に、データを学術的な共有財産としてどう設計していくかという実践でもあるのだろう。

便利な道具として使いはじめたフォトグラメトリを、研究の方法として鍛え直す。本書はそのきっかけをくれる。日々の計測のかたわらに置いて、折にふれて読み返したい一冊である。

アルカ通信 No.276

発行日 2026年9月1日
企 画 角張淳一(故人)
発 行 考古学研究所 (株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : <http://www.aruka.co.jp>